# 私の疎開戦争記

熊谷　冨美恵
中野二丁目

第二次世界大戦終戦後、はや四七年目を迎えようとしています。本当に遠い昔なのに、私にはつい此の間のように思われるのです。私は、昭和十九年八月、牛込仲之国民学校の学童疎開に寮母として、栃木県益子町で七十数人の子供達を、東京からの寮長先生と若い二人の先生、そして私達四人の寮母と現地の作業員三人とで世話をすることになりました。

当初は、三年生以上の子供達だったのが、二〇年三月の大空襲以後は兄弟のある子は、一年生でも疎開できるようになり、たちまち九〇人以上にもなったことがありました。

小さい子供達は、両親から離れどんなにか淋しい思いをした事でしょう。よく夜になりますと、忍び泣きの声がきこえて来るのです。なだめながら一緒に床の中に入って抱いて眠ることが度々でした。まだ若かった私達はもんぺ姿での毎日で、日が経つにつれて食糧不足は激しくなり、大きなリヤカーをひいては、五、六年の男女生徒に手伝ってもらい、遠い百姓家の畑に手伝いをして、お芋や野菜類を分けてもらいに行ったものでした。

毎日毎日沢山の洗濯物を、今のように洗濯機が無かったので、手洗の水の冷たさ、そしてその洗濯物を干している足元にぴょんぴょんと飛びつく蚤（のみ）のかゆさも、今ではまったく想像もつかないことです。

又肌着には、びっしりとしらみが卵を産み、火鉢の上ではたくとパチパチと音をたてて飛び散ったり、ブツブツ、ピチピチと卵をつぶすのが子供達の寝顔を見ながらの一仕事でした。髪のしらみも今はほとんど見られませんが、当時の疎開地では頭にびっしりとくい込んで、かゆさにそこができもののようになって、そこにうようよとあつまってたかるのです。薬をつけてもなかなか治らず、女の子の大切な髪の毛なのに、短くかって薬をぬりこむ等、思い出しても背筋がむずがゆくなる程ひどい子供もおりました。

お風呂に入れて一人一人手をかけて洗ってあげるのも一仕事、寝小便（おねしょ）をする子供もいて、その布団の仕末をすることの労働、

あれこれが走馬燈のように脳裏に浮かんでまいります。若かったから、あの頃それだけ動けたのでしょうと思います。

戦争はますます激しくなって、いよいよ食卓の上にはお芋だけのことが多くなっていきました。月一回父母が面会に見えて、着替えの衣類や、苦労して手に入れたおやつや、購入依頼物などを受け取るその日は、子供にとっても職員の私共にとっても楽しみの一つでした。父や母と懐かしげに庭で話し、そっと少しばかりのお菓子を口にしたりして、やがて山の坂道を父や母は別れを惜しみつつ、振り返り、振り返り帰って行くのを、「さようなら」「また来てね」と、涙を流しながらいつ迄も大きな声で見送っていた光景は忘れることが出来ません。大きく手を振りながら子ども達の肩を抱え、一緒に涙しながらお互いの無事を祈らずにはいられませんでした。

そんな苦労の中にも一つだけ楽しい思い出がありました。それは私達のお隣りの校舎に、軍隊の兵隊さんが、二〇年六月一日に駐屯してきたことです。どんなに心強く思ったことでしょう。子供達も大喜びでした。

空襲警報が鳴るようになりまして、皆をつれて竹藪（やぶ）の中に避難するのです。

その兵隊さんと子供達との交流もあって、いつか兵隊さんと一緒に、慰問会を開くことになりました。寮母の中に、日本舞踊の先生格の方がいましたので、女の子に踊りを教えたり、自分も又「野崎まいり」等を踊ったり、歌をうたったり、そして兵隊さん達もうたったりして、戦争中ということを忘れたように一刻をすごしたことでした。

そんな最中にも、いよいよ終戦間近になりますと、空襲警報のサイレンが鳴りひびきますと、子供達を避難させるのです。今思いますと、あの爆音は私共の頭の上を通過して宇都宮にある部隊を攻撃し、焼夷弾を落とすのです。私達の小学校は山の上にありましたので、山の高い所に登って見ていますと、遠く宇都宮方面にチラチラと焼夷弾が落ちて行くのが、まるで花火のように美しく見えるのです。そしてぱっと明るく火の手があがるので、まるで大きな美しいパノラマのようにひろがって見えるのです。やがて又頭の上をB29が通って行きました。

勿論我々のいる小さな山の上の学校には一回も落とすことなく無事でよかったです。あの宇都宮の軍隊基地に落とす為に、頭の上を通って行ったのです。竹藪の中にかくれることもなかったのにと今は思いますけれど、その時は必死になって子供達に防空頭巾をかぶせ、かばいながら逃げたことが忘れられません。

大きい男の子達は、兵隊さんと仲良しになり、歌を教えてもらったり食べ物をそっともらったようですが、それはもう見ないふりです。食べ物のうらみは恐いと言う言葉がありますが、あの当時感じた子供達の頭の中に残っているひもじかった辛さ

は、世話をしていた私共の思いもよらない位はっきりとしているのでした。

ある夜それはもう終戦も近い夏の夜の事でした。子供達を寝かせて、あまりにも暑かったので、私達が交替で庭に出て涼んでいたのです。突然にラッパが鳴って、バタバタと廊下を走る編上靴の音がひびきました。校庭に素早く兵隊さん達が並んだのです。「あ！　何が起こったのかしら」と、とっさに子供達をどうしようと思いました。と突然に点呼です。いない、足りない兵隊がいたのです。それから暫らくして、その兵隊が見つかりました。村の彼女と会っていたとのことでした。その時、その兵隊は、あの編上靴でたたかれて、叱られている音を近くできいてしまったのです。ピシッピシッと、でも何も言わず、上官のするがまま大きな声でどなられ、たたかれていました。私達はびっくりして声も出ませんでした。怖い、ひどい、嫌だなあと、只軍隊の厳しさだけが皆の胸に残ったと思います。

次の日そっと、どうなったか心配で、そっと兵隊さんを見に行きました。顔がはれあがって、休んでいました。可哀想でした。

やがて、まもなく戦争が終わりました。敗戦になり軍隊も解散になって、ぽつぽつと益子町の駅から別れて行きました。勝てば兵隊さんもいばって帰れたのでしょうけれど、負けたのですから、皆いろいろのことがあり、どんなにか複雑な思いで別れていったことでしょう。おそらく村の恋人を残して。あの兵隊さんだけでなく、何人か恋愛をしたことと思います。たった四か月位の間の出来事が随分長い月日だったように思いだされます。

そして私達も、十月頃より子供達と共に東京に帰ってまいりました。私も寮母の仕事を終えて解散となり、帰る家も空襲で焼けてしまい、両親は疎開先で赤痢にたおれ上京出来ず、親切な疎開に行っていた学童の家が幸いに焼けなかったので、その一室を貸りて、何も無い生活が始まりました。そして疎開の寮でご一緒だった先生のお世話で、今の主人と結婚することが出来ました。

四六年の年月が流れ、今は三人の子供と五人の孫に恵まれて、はや古希を迎えて静かに幸せな毎日を過ごしております。

今もその折りの疎開児童だった子供達が立派に成長、出世して、会社の社長さんもいれば、孫のいる方もいるのです。一年おき位に益子疎開を偲ぶ会を開き、私共生存しています先生や寮母を招いて下さり、思い出話しに、又懐かしい当時の兵隊さんに教えていただいた歌を唄って聞かせてくれます。

一昨年は、あの頃の仲良しだった兵隊さんを、出身地と名前だけを頼りに探し当てて出席していただき、お互いにすっかり年をとってしまい、あの頼もしい元気いっぱいだったあの方が、優しい顔の好々爺になられて、お互い懐かしさに涙を流して当

時の思い出を語りあかしました。

「私達の父も母ももう亡くなってこの世にはいません。これからは貴女達がおかあさんです。どうか長生きして、いつ迄も元気に、又次の会に出席して下さい」と……

涙が出る程嬉しく、若き日の誰もが経験出来るものではない尊い青春の想い出、戦争は二度とあってほしくないことです。

この体験を大切に、これからは孫達に話してわかる時がきましたら、物語って聞かせようと思っております。と共に、戦争の恐ろしさもしっかりと語っておきたいと思います。

平成三年十二月八日、五〇年前の開戦の日を思い出しながらしたためました。